

雑誌論文引用形式の簡略化

Simplified Bibliographical References to Journal Articles

安 西 郁 夫
Ikuo Anzai

Résumé

This writer stresses the need of simplified forms of bibliographical references to journal articles and explains it in 6 chapters.

I. Literature citation systems are grouped in A (list at end), B (footnotes), C (in-text), and subdivided into A-1 (alphabetical arrangement without numbering), A-2 (alphabetical arrangement with numbering), A-3 (numerical arrangement by order of citation), B-1, (full footnotes), B-2 (simple footnotes with a separate list) and C. Examining merits and demerits of each, the writer recommends A-2 as his preference. Table 1 is the result of the writer's survey on literature citation systems in 300 medical journals, and it indicates the prevalence of A-2 (60%).

II. The simplification of author entries is discussed: Initials of first and middle names are parenthesized. The mark & replaces *and*, *und*, *et*, and so forth. The abbreviation *etc.* is used instead of *and others*, *et alii*, and so forth.

III. The discussion is concentrated upon brief titles of journals, especially upon initial-letter abbreviation. And the need of international coordination and control on abbreviations is emphasized.

IV. The writer discusses how to indicate volume numbers and dates of publication, comparing Bishop's Coden (date omitted)^{1), 2)} with Reid's Sigils (volume omitted).⁵⁾

V. Pagination is the subject. The writer maintains that such abbreviations as pp., p., ff., f. can be eliminated, and that only the first page, neither inclusive pages nor a particular page cited, should be indicated.

VI. Some concrete examples are shown. Commenting on Shera's objection⁶⁾ to Dunkin,³⁾ the writer concludes that librarians are generally conservative about forms of bibliographical references because they can not be free from the curse of descriptive cataloging.

(Japan Library School)

(Note) The list of references at the end of this paper follows the pattern provided for by this journal, not the writer's own except for the numbering system.

緒 言

- I. 引用文献揭示の諸方式
- II. 著 者 名
- III. 誌 名
- IV. 巻号と刊年
- V. ペ ー ジ
- VI. 具 体 例

緒 言

論文の執筆者は、やっとの思いで原稿を書き上げても、解放感を味わうことを許されない。引用文献リストの作成という煩雑な仕事が彼を待ち受けているからである。しかも、この煩雑さの余波は雑誌編集者にまで及ぶ。執筆者ならびに編集者をこの煩雑さから解放する簡便な方法がないものか——と誰しも思わずにはいられない。

かつて Paul S. Dunkin³⁾ は、“幸せは長い脚注”と題するアイロニカルな論文を書き、かなり思い切った引用文献揭示の簡略化を提唱したことがある。彼は冗漫な脚注を批判するとともに、文末に添える参考文献表の形式をも併せ論じている。彼によれば、引用文献表(脚注)は参考文献表とは異なり、finding list たることをその本質とすることを強調し、finding のために必要としない要素を切り捨てることを主張した。例えば、単行書引用の場合はタイトルを必要とするが(それがなければ探せないから)、雑誌の場合は論文のタイトルを必要としない(それがなくとも探せるから)と論じている。

同論文の末尾には、次のような編集者の注が付されている。“この著者とこの編集者は、数年もの間この問題に関して論争を続けてきた。この論文の掲載により、我々は多分他者を論争に引き入れることができよう。”

筆者は別段この誘いに応じて拙稿を草した訳ではないが、簡略化方式の摸索に Dunkin の論が一つの刺激を与えたことは事実である。拙稿では雑誌論文の引用形式に問題の焦点を絞り、Dunkin の方式以外に、わが国の館界では注目されなかった Coden 方式ならびに Sigil 方式を取りあげ、簡略化の立場から筆者の意見を展開することにした。

I. 引用文献揭示の諸方式

引用文献の揭示方式は種々あるが、次の3群に類別することができよう。

A. 文末方式

- A-1. 本文中の著者名に括弧で刊年を付記し、文献は文末に著者名のアルファベット順に配列する。同一著者の同一刊年論文を幾つか示す時は、刊年の後に a, b, c, ……を付記する。
- A-2. 引用文献は文末に著者名のアルファベット順で配列し、文献に一連番号を付け、本文中ではこの番号によって文献を示す。
- A-3. 本文中では引用の都度一連番号を示し、文献は文末に一連番号順に配列する。

B. 脚注方式

- B-1. 引用したページの下部に文献を掲げる。
- B-2. 脚注は著者名、刊年、ページ程度の事項に限り、文末に詳細記入の文献表を掲げる。

C. 文中方式

引用文献を括弧に入れ、本文中に挿入する。

前掲3方式のうち、Cの文中方式は使用されることが稀である。思い切った簡略化のない限り、本文が冗長になり、論理的連続が分断され、読みづらいからである。

Bの脚注方式は、単行書は別として、雑誌論文では、Aの文末方式に較べて用いられることが少い。引用文献を同じページで見ることができ、一々文末を見る手間が省けることが B-1 方式の大きな利点ではあるが、それ以外には利点と考えられるものがなく、反って次の如き種々の欠点を藏している。

- (1) 文献の追加・削除や本文の変更があると、大巾に版を組みかえねばならぬことがある。
- (2) 同じ文献を繰り返して引用する場合は、反覆記載の煩を避けるため、通常 *ibid.* や *op. cit.* などの省略記号を用いるが、その度ごとにページを前に返して最初の記入を探さねばならず、脚注方式の最大利点が死んでしまう。幾つもの文献についてこれらの省略記号が使われている場合は、殊に煩わしい。
- (3) 同一ページ中で多くの文献が引用される場合、脚注の部分が膨大となり、footnote があたかも本文の如き観を呈し、本文が headnote に退化しかねない。

一方 B-2 方式では、一々文末を見る手間が省けるといふ脚注方式の最大利点が殺され、しかも B-1 に見られる脚注方式の欠点は、縮小されながらも受け継がれて

いるのである。

以上のような理由から、脚注を用いるとしても、それは付加的説明の注記に限定し、文献は References とし、文末に一括掲示することが望ましい。

文末方式では、A-1 と A-2 が主として理工系の雑誌論文に好んで用いられ、A-3 は人文・社会科学系に多く見られる。

表 1. 医学雑誌の引用文献掲示方式

	A-1 方式	A-2 方式	B-1 方式	計 Total
洋雑誌 Foreign J.	95 (42.2)	120 (53.3)	10 (4.5)	225 (100)
和雑誌 Jap. J.	14 (18.7)	60 (80.0)	1 (1.3)	75 (100)
計 Total	109 (36.3)	180 (60.0)	11 (3.7)	300 (100)

注：（ ）内の数字は%

表 1 は筆者が医学関係雑誌について引用文献掲示方式を調査した結果をまとめたものである。慶大医学図書館所蔵の雑誌からアルファベット順に 300 誌を選び、各誌の最新号（1965年12月末現在）の最初の論文について掲示方式を調査し、類別したものであるが、この表によっても B（脚注方式）の劣勢は明らかである。人文・社会科学系に多い A-3 方式が見当たらないことも注目に値する。洋雑誌では A-1 と A-2 の間にそれほど大きな差はないが、和雑誌では A-2 が A-1 の 4.3 倍にも達していることは興味深い。

A-1 方式は、文献の追加・削除が比較的自由にできる点で A-2、A-3 よりも優れているが、多数の文献を続けて引用する場合は本文が冗長になり、この点では A-2、A-3 に劣ると言わねばならない。

同一文献を繰り返し引用する場合、A-3 では *ibid.*（直前掲示文献に同じ）、*op. cit.*（前掲文献に同じ）、*loc. cit.*（前掲文献の同箇所）などの省略記号が使われるが、複数の文献についてこれらの記号が使われていると、読者を迷わせることが少くない。

理工系の論文が一般に短いのに対して、人文・社会科学系の論文は比較長く、また単行書を引用することが少くないので、引用の都度その文献のどの箇所を引用しているかを示そうとする傾向が強く、同一文献を反覆表示しなければならなくなる。これに反して、理工系の場合は、引用文献の初ページと終ページを一旦表示すれば

それでよいとの考え方が顕著である。論文の性格が理工系とは異なるにせよ、人文・社会科学系の場合も *op. cit.* や *loc. cit.* の行列を避け、掲示方式を A-1 や A-2 に接近させることが望ましいように思われる。

ちなみに本誌 *Library science* は A-3 方式で統一されている。本誌の方式は図書館学科の学生にそのまま踏襲させるため、教育的配慮からオーソドックスな詳細記述形式が採用されている。これはまた孫引きの防止にも役立つとも考えられており、正確を期すため編集者が一々原文献をチェックする際に便利であるとも考えられている。

筆者は編集委員会の承認を得て、A-2 方式を本稿で使用した。これは、番号による参照という点で本誌の A-3 方式に一致し、統一を乱すことが少いからである。また、統一を乱さぬ建前から、文献の記述形式は本誌の規定する形式に従い、筆者自身の形式にはよらなかったことを明記しておきたい。

II. 著者名

引用文献を表示するために記載される項目としては、雑誌論文の場合は、著者名、論文題名、誌名、巻号、ページ、刊年などがある。その配列には幾多の方式があるにも拘わらず、著者名を頭置する点では殆ど差がないと言えよう。

著者名の構成要素の中で識別の第 1 の手掛りとなるものは姓であると考えれば、自然形において姓が名の後に置かれる著者名は、コンマによって倒置し、姓を前置することが望ましい。A-1、A-2 の方式では、文献は著者名のアルファベット順に配列されるから、姓の前置は絶対に必要である。とは言え、姓の倒置には一つの問題がある。どの部分が姓であるかの判別が必ずしも容易でない人名があるからである。判別の困難を重視する人々は、著者名を原記載のとおりに記載することを主張する。A-1、A-2 を除く他の方式では、そうすることに格別の支障はない。とは言え、姓の判別の困難な著者名の出現する率は一般に低いと考えられるから、判別的手段が得られる場合は倒置することが望ましい。判別的手段が得られぬ場合は、平山健三⁴⁾ が一案としてあげた“人名索引カードをつくるためであれば、一番最後の独立した 1 語を索引語とする”方式を便宜的に応用してもよいであろう。

姓の問題に次いで、first name や middle name をフルに記載するか、それともイニシャルのみにするかが

問題となろう。例えば、James Lawrence Smith という姓名の記載形式は、倒置方式においても、次のようにさまざまである。

- (1) Smith, James Lawrence
- (2) Smith, James L.
- (3) Smith, J. L.

いずれの形がよいかについては甲論乙駁があるところから、原記載形に従うという方式もある。本誌もその立場をとっているが、簡略化のためには (3) の略記形がよいであろう。一般に英国系の文献では、著者名の原記載そのものが J. L. Smith の如き略記形をとることが一般的なので、問題がない。

長い姓名や、複数姓名の連記形では、姓と名の混同を生ずる場合がある。混同を避け、主標識たる姓を名から際立たせるためには、種々の手段が講じられている。最も一般的なのは、SMITH の如く姓をスモール・キャピタルにする方法である。タイプライター使用の場合にはフル・キャピタルにすることがある。

その他に、Smith (James L.) の如く名を括弧に入れる方法もある。この場合イギリス人であれば、

Smith (J. L.)

となるが、*Library Association record* では

SMITH (J. L.)

の如く、スモール・キャピタルと括弧を併用している。この併用はインドで発行されている *Library science* にも見られるが、同誌では、

SMITH (J L)

となり、略符号のピリオドを省いている点が注目される。省略できるものは可能な限り省略するという立場からは、同誌の方式が支持されよう。

共著者を並記する方式は次の 3 種に類別される。

- (1) 自然形+自然形+……
James Smith+Robert Kent+Ann Mills
- (2) 倒置形+自然形+……
Smith, James+Robert Kent+Ann Mills
- (3) 倒置形+倒置形+……
Smith, James+Kent, Robert+Mills, Ann

論理的には自然形+倒置形という組み合わせもありう

るが、まったく無意味であるから除外される。最後のプラス記号には and, und, et などの各国語が使用され、それ以前のプラス符号にはコンマ(時にはセミコロン)が使われるのが一般的である。また、イギリス人がドイツ語やフランス語の文献を引用する場合にも、自国語形の and で押し切ることが多い。ただし、日本人が欧米の文献を引用する場合に引用者自国語主義を適用している例は見られず、引用者に最も馴染の深い外国語形が使われたり、引用文献ごとに各国語形が使われけられたりする。引用者自国語主義が強引に過ぎ、文献国語主義が煩雑であるとすれば、国際的に通用する記号を統一的使用すべきである。そのような記号として、筆者はラテン語 *et* から作られた & を推したい。

共著者多数の場合は、代表著者または最初に掲げられた著者の姓名のみを記載し、and others または *et al.* などと続けることが慣行となっているが、筆者は、略語として普遍的に使用されている *etc.* の採用を勧めたい。

〔例〕 Smith (J L) & Anderson (R)

Smith (J L) *etc.*

III. 誌 名

雑誌名をフルに記入することに煩わしさを感じる人は決して少くない。多くの人々が誌名を略記する。識別に支障をきたさない限り、略記は正当化されるが、省略法が人によって区々であり、類似の誌名がある場合には混乱を起しかねない点に問題がある。誌名の省略法については、特に理工系の分野において、各国の学会や国際団体によって早くから統一が計られている。また各分野の代表的な索引誌や抄録誌には収録誌略名表が付いているので、それらを典拠とすることも可能である。しかしながら、学会により、抄録誌により、異なった略名を与えられることが少くない。総合的研究と境界領域の増加は、学問間の境界を破壊し、引用文献の範囲を流動化しており、その意味においても、あらゆる学術雑誌の略名の国際的統一が強く望まれている。

著名な誌名は、*JAMA (Journal of the American Medical Association)* の如くイニシアルで略記される場合もある。Dunkin³⁾ も、場合によってはイニシアルだけでよいと主張しているが、このイニシアル法の利用を著名誌以外のものにまで拡大することはできないであろうか。

このような疑問に答える方式の一つに Charles Bishop¹⁾ の Coden 方式がある。これは、略誌名、巻次、

論文の初ページのみによって文献を表示しようとする画期的な方式である。この方式では、誌名は次のルールにより4字で表わされる。

誌名1語の場合：その語の初めの4字をとる。

(*Science*→SCIE)

誌名2語の場合：各語の初めの2字をとる。

(*Analytical chemistry*→ANCH)

誌名3語の場合：初語と次語の初字および第3語の初めの2字をとる。

(*Journal of biological chemistry*→JBCH)

誌名4語の場合：各語の初字をとる。(Berichte der deutschen chemischen Gesellschaft→BDCG)

誌名5語以上の場合：初めの4語の初字をとる。

この Coden 方式に対する批判的代案として、Insdock の J. B. Reid⁵⁾ は Sigil 方式を提唱した。これは刊年、略誌名、論文の初ページによって構成され、略誌名は4字に限定せず、次に掲げる例の如く、3語以下のものは語数に応じて定めることになっている。

Nature→N

Physical review→PR

British medical journal→BMJ

1字に省略されるのは、*Nature* や *Science* の如き1語の誌名に限られず、頻繁に引用される著名誌で、その分野で1字に省略されることが慣行となっているものは、次例の如く1字に省略される。

Annalen der Chemie→A

Gazzetta chimica italiana→G

Journal of the Chemical Society→J

Coden 方式が略誌名を4字に限定するのは、斉一性が判然たる識別を容易にすると Bishop²⁾ が考えたからであるが、これに対して Reid⁵⁾ は、4字に限定するのは不自然でもあり、不経済でもありと考え、彼の方式に伸縮性を持たせた。1字～4字の組み合わせは475,254個であるが、4字に限定すると456,976個に減少することから、Coden を不経済的とする批判が生れていたのである。

その優劣は別として、両方式に共通して言えることは、

組み合わせのキャパシティは十分でありながら、略誌名の重複が相当に激しく、実効性が著しく減殺される恐れのあることであろう。少くとも、同一分野内での略誌名の重複は絶対に避けねばならず、そのための国際的調整が権威ある団体によって行なわれねばならない。

前述の如き危険を孕んでいるとは言え、煩雑を解消するための簡略方式が望まれ、電子計算機その他の機械が書誌的サービスの分野に導入され、machinable な簡略形が要求されている今日、Codon と Sigil は多くの示唆を我々に与えると言わねばなるまい。

IV. 巻号と刊年

雑誌には通常巻次と号次とがある。引用文献の発行順次を表示する際に、巻次と号次の両者を併記する必要があるかどうかの一つの問題となるが、この場合には pagination と刊年(月)の問題を併せて考察しなければならない。

Pagination には次の3種がある。

- (1) ページ番号は号ごとに更新する。
- (2) ページ番号は巻ごとに更新する。
- (3) 通巻ページ番号と各号ページ番号の両者を併有する。

通巻ページを持たない(1)の場合は、巻次と号次を併記しなければならないが、大多数の学術雑誌は(2)または(3)に該当するので、一般原則としては、巻次さえあれば識別は可能であると言える。ただし、この原則が有効に働くためには、雑誌のバック・ナンバーが巻を単位として製本されていなければならない。個人所蔵の雑誌が製本されることは稀なので、号次の欠如は図書館外での探索をある程度不便にする。筆者はかつて某雑誌の昭和初期の号を探し求めたことがある。利用しうる範囲の図書館にそれが所蔵されていなかったのも、やむなく古本屋を漁り廻った挙句、神田の古書即売展で入手することができたが、このような場合、X誌のY巻Zページという探し方は有効ではなく、X誌のY巻Z号というアプローチをとらねばならない。尤も、ライブラリーに近い将来文献探索の場としての機能を十二分に発揮するであろうとの想定に誤りがなくとすれば、筆者の経験や、それに類する経験は、例外的な不幸として片付けることができよう。

オーソドックスな方式では、英語形であれば巻次には vol. を、号次には no. を用いるが、これに相当する略語は国によって異なるので、その使い分けはかなり面倒

である。最近では、これらの略語を付記せずとも混乱は起らないという考えから、理工系の論文では、略語を付記せず、巻次をゴチック体で表記し、号次を併記する場合は括弧内に入れる方式が激増している。

〔例〕 vol. 5……………5

vol. 5, no. 3 ……………5(3)

Coden 方式では号次は省略し、巻次は算用数字のみで表示する。*Physical review* の如くシリーズのあるものは、例えば ser. 2, vol. 24 であれば、II 24 と記載されるが、後にこれは 2/24 とするよう改められた。²⁾ *British medical journal* の如く 1 年間を単位として複数巻を発行し、巻次を毎年更新する雑誌の場合は、刊年を表示し、巻次をローマ数字で付記し、1952 年の vol. 2 は 1952 II と記載するが、後にこれは 1952/2 とする方式に改められた。²⁾

これに対して、Sigil 方式では巻次を用いず、代りに刊年を用いる。刊年が今世紀の場合は下 2 桁を、19 世紀以前の場合は下 3 桁をとり、略誌名の前に付ける。年間の途中でページ番号が更新される雑誌の場合は、巻次の末尾の数字を略誌名の後に付ける。例えば、*Nature* の vol. 19 (1879 年刊) は 879N9 と表示する。年間を通じてページ番号が一連であるかどうかを確認できない雑誌についても同様の措置をとる。

要するに、Sigil 方式は、刊年が論文の実際的価値を判断する重要な手掛りであり、人は最新の情報を求めるものであるという考え方に立脚しているのである。理工系では常に“より新しい情報”が求められ、従って刊年が重視されているのは事実である。しかしながら、Dunkin³⁾ の言う如く、引用文献リストの本質が finding list であるならば、探索を不便にすると考えられる巻次の欠如は、Sigil 方式の価値を減ずるであろう。

Sigil は刊年を頭置する思い切った方式をとっているが、一般には、刊年は著者名の後か巻(号)次の後、あるいは末尾に置かれる。引用文献の揭示が A-1 方式である場合は、刊年が著者名の直後に置かれることは言うまでもない。

なお、発行の月を付記するオーソドックスな方式もあるが、月は省かれてよい。発行月は号次と性格が重複する関係にあり、二者択一するとすれば、筆者は号次を選ぶ。通俗的な月刊誌は何年何月号というアプローチを一般にとるが、学術雑誌は何巻何号というアプローチをとるからである。

V. ページ

ページ数の表示に当り、最もオーソドックスな流儀では、単数には p. を、複数には pp. を略記号として用いるが、今日では、単数複数を問わず p. を用いる方が優勢である。実際問題として、敢て pp. とせざるをえない合理的な理由はないように思われる。略記号が必要であるならば、p. (または p) で十分であるが、国によってこの形は異なる。この種の略記号は国際的なものであることが望ましいが、これに関しては、p. を英語形 page の略とは見ず、ラテン語形 pagina の略と見なし、国際的な記号として使用するという考え方⁷⁾ もある。筆者もこの解釈に賛成である。と同時に、巻次と明瞭に区別できるならば、p. を用いる必要はないと考える。

ページの示し方には次の 3 種類がある。

- (1) 引用する特定のページのみを示す。
- (2) 論文の最初と最後のページを示す。
- (3) 論文の最初のページのみを示す。

人文・社会科学系では、単行書から引用することが少ないので、雑誌論文についても、引用する特定のページのみを表示する習慣が残っている。理工系では (2) または (3) の方式が一般に用いられている。理工系の論文は人文・社会科学系に較べて短く、また引用された箇所のみを読むのは無意味に近いという認識が、そこに作用していると考えられる。筆者も、(1) と (2) の二者択一を迫られるならば (2) を選択する。

(1) の方式では、引用部分が 2 頁以上にまたがる場合に f. (and the following page) や ff. (and the following pages) を用いることがある。例えば、引用部分が p. 146 から p. 147 にまたがる場合には p. 146 f. と記し、p. 146 から p. 148 に亘る場合には p. 146 ff. と書く。また *et sequens* および *et sequentes* の略語 *et seq.* を単複両形に用いることもあるが、この種の略語は使用せず、ページ数をハイフンでつなぐ方がよい。

(2) の方式では、論文の最初と最後のページ番号がハイフンで結ばれるが、ハイフンに続くページ番号を完全を書く場合と略記する場合とがある。すなわち、前者で 165-167 と書かれるものが、後者では 165-7 と簡略化され、前者で 169-172 となるものが、後者では 169-72 となる。完全形で記載する目的は誤解の防止にあると思われるが、165-7 を p. 165-p. 7 と誤解し、169-72 を p. 169-p. 72 と誤解する恐れはないであろう。とすれば、完全形で記載する必要はなく、略記すればよい。

次に (2) と (3) のいずれを選ぶかという問題が残されているが、Coden も Sigil も論文の最初のページのみを表示する方式をとっている。両方式ともに著者名および論文題名を欠き、同じページに異なる論文が掲載されている場合は他に識別の方法がないので、ページ番号の後に a, b, c ……を付記することになっている。例えば、p. 123 の第1論文は、123 a, 第2論文は 123 b となる。

初ページのみの表示では、論文の分量を計ることができず、原論文を見ずに複写を依頼する場合などに不便であるという批判が出るであろうが、引用文献リストが finding list であるならば、最初のページ番号を表示するだけで事は足りよう。

VI. 具 体 例

雑誌論文引用形式の簡略化について種々述べてきたものの、構成要素別に論じたため、筆者の主張する簡略形の全体像は必ずしも具体的には明らかにされていないと思われるので、この結章において具体例を若干示してみようと思う。

簡略形のあり方は、第I章で類別した揭示方式のいずれをとるかによって異なる。

以下にオーソドックスな詳細形式で掲げる4文献（いずれも架空）を例にとり、各方式でどのように簡略化が可能かを示してみたい。

Brown, John, Gray, Robert H., and White, G. K.
“Essential elements of bibliographical citations,” *Library science quarterly*, vol. 30, no. 1, April 1972, pp. 22-25.

Green, William R. “Simple bibliographical references,” *International journal of documentation*, vol. 24, no. 2, July 1971, pp. 113-115.

——— “Literature citations,” *Library review*, vol. 17, no. 3, Sept. 1972, pp. 186-188.

黒田一郎. “文献の引用形式,” *図書館評論*, vol. 15, no. 1, 1973. 1, pp. 35-39.

A-1 方式

“Green (1971) が文献引用形式の簡略化を主張したのに対して、Brown, Gray & White (1972) は簡略化によって生ずる混乱を指摘して反対したが、Green (1972) はその反論において簡略形の能率性

を強調し、黒田 (1973) もそれを支持した。”

上記の本文に対応する文末の引用文献表は Coden 方式を応用すると次のようになる。

Brown, *etc.* (1972) LSQU-30-22

Green (1971) IJDO-24-113

—— (1972) LIRE-17-186

黒田 (1973) TOHY-15-35

Sigil 方式を応用すると次のようになる。

Brown, *etc.* 72 LSQ 22

Green 71 IJD 113

—— 72 LR 186

黒田 73 TH 35

前掲方式によれば digit 数は最小となり、わざわざ文末に掲げる必要はなく、直接文中に括弧で挿入することができよう。しかしながら、ここまで簡略化することに大きな抵抗があるとすれば、次に示す程度に簡略化を留めることも考えられる。

Green, W. R. (1971) Simple bibl. references.
Int. J. Doc. 24, 113

黒田一郎 (1973) 文献の引用形式 図評 15, 35

A-2 方式

“Green²⁾が……, Brown, Gray & White¹⁾は……, Green³⁾は……, 黒田⁴⁾もそれを支持した。”

1) Brown, *etc.* 72-LSQU-30-22

2) Green 71-IJDO-24-113

3) —— 72-LIRE-17-186

4) 黒田 73-TOHY-15-35

前例も次の程度に詳細化することができる。

1) Brown (J) *etc.* Essential elements of bibl. citations. *Lib. Sci. Q.* 30 (1972) 22

4) 黒田一郎 文献の引用形式 図評 15 (1973) 35

A-3 方式

“Greenが……主張した¹⁾のに対して、Brown……

反対した²⁾が、Green は……強調し、³⁾ 黒田もそれを支持した。⁴⁾

- 1) Green 71-IJDO-24-113
- 2) Brown, etc. 72-LSQU-30-22
- 3) Green 72-LIRE-17-186
- 4) 黒田 73-TOHY-15-35

この例では、たまたま同一文献の重複引用がないからよいが、一般に A-3 方式では *ibid.*, *op. cit.*, *loc. cit.* の行列が作られる。*Ibid* は使ってよいが、*op. cit.*, *loc. cit.* は使用を避け、簡略なのであるから、その都度全項目を繰返し記載する方がよい。

B 方式

脚注は記載をなるべく簡潔にする必要があるのも、Codan または Sigil 方式を準用すればよい。Dunkin 方式だと次のようになる。

- 1) *IJD* 24 (1971) 113
- 2) *LSQ* 30 (1972) 22
- 3) *LR* 17 (1972) 186
- 4) 図評 15 (1973) 35

Dunkin³⁾ は引用部分のページのみを表示することを主張しているので、論文の初ページを表示することに改めて応用すればよい。

前掲の諸例については、論文題名の欠如と誌名のイニシャル表示とに対して、特に強い批判が加えられることが予想されるが、問題は我々が引用文献表の機能をどのように理解するかに懸っている。引用文献表に対して我々は何を期待すべきであり、何を期待すべきでないかが先決されない限り、この問題の論争に終止符を打つことはできないであろう。引用文献リストが本来 *finding list* であるならば、論文題名は不要であろう。しかしながら、たとえ二次的にせよ、*reading list* 的な機能を期待するのであれば、論文題名の欠如は不満の因となるであろう。

誌名のイニシャル表示は、国際的な調整を前提としているので、今日の形式としては前面的に通用するものではない。しかしながら、明日の形式としては否定さるべきものではない。今日の現実的要求に答えるものとしては、簡略化を緩和した形式を示してみた。これらの緩和形式は今直ちに使用しうるものであり、現に理工系では

類似の形式が一般化しつつある。図書館界でこのような形式の採用に遅滞と逡巡が見られるのは、ライブラリアンなるが故に、記述目録の呪詛に対して自由でありえないからであろう。

ここで筆者は Dunkin に対する Shera⁶⁾ の批判の一部を引用してみたい。

“Paul はまた余剰の原理に反対しているが……余剰は人間の生物学的構造そのものに組込まれているものなのである。……我々は混乱を少くするために言葉に余剰を詰め込む。著者名や書名や誌名を……できる限り略記するという提案は、甚だ曖昧な引用から原文献をつきとめようと試みた経験を持つ者の賞讃を受けないであろう。”

これは Dunkin に対する批判であると同時に、拙論に対する批判でもある。確かに我々の言葉は、一般の文章においても、日常の会話においても、余剰を伴っている。そしてこの余剰ゆえに、多少のノイズがあっても、我々の意はほぼ誤りなく伝達されるのである。とは言え、我々は一方において、余剰を切り捨てた電報を必要とし、多用していることも事実である。

稿を終るに当たって、Codan と Sigil の優劣——と言うよりは選好——について一言しなければならない。筆者はどちらかと言えば Codan に傾いている。それは後者よりも digit 数が多いにも拘わらず、斉一性を保ち、整然としていて理解しやすく、使いやすい。使いやすく、見やすく、理解しやすい方式でなければ、引用文献表作成にまつわる悩みは解消しないであろうから。

(図書館学科)

- 1) Bishop, Charles. “An integrated approach to the documentation problem,” *American documentation*, vol. 4, no. 2, April 1953, p. 54-65.
- 2) ——— “Codan versus sigils,” *American documentation*, vol. 5, no. 1, Jan. 1954, p. 28-9.
- 3) Dunkin, Paul S. “Happiness is a long footnote,” *Library resources and technical services*, vol. 7, no. 4, Fall 1963, p. 403-5.
- 4) 平山健三. 知識の整理. 東京, 南江堂, 1965. p. 98.
- 5) Reid, J. B. “Chronological sigils,” *American documentation*, vol. 5, no. 1, Jan. 1954, p. 26-8.
- 6) Shera, Jesse. “Without reserve,” *Wilson library bulletin*, vol. 38, no. 6, Feb. 1964, p. 485.
- 7) 富田軍二. 科学論文のまとめ方と書き方. 東京, 朝倉書店, 1953. p. 107.